

群 教 七	G06 - 02
	平16.221集

# 表現運動における生き生きとした 豊かな表現力を育てる指導の工夫

## - 「動きのデッサン」を学習活動に取り入れて -

特別研修員 落合 裕子 (高崎市立南八幡小学校)

### 《研究の概要》

本研究は表現運動の学習活動において、即興的な表現を行う「動きのデッサン」を繰り返し取り入れることにより、生き生きとした豊かな表現力を育てていこうとしたものである。具体的には小学校中学年の表現の授業において、児童の実態に応じて題材や仲間とのかかわりを考慮しながら「動きのデッサン」を単元を通して行い、多様な表現が自信をもってできるように指導を工夫した。

【キーワード：体育 表現運動 表現 即興的な表現 動きのデッサン】

### 主題設定の理由

子供たちは自然に触れながら遊んだり、友達とかかわり合ったりすることでたくさんの発見や驚きから感動を得ることができる。その感動や驚きは子供たちの想像力を高め、豊かな表現力へとつながる。これは子供たちの豊かな心をはぐくむ上でも大切な体験であると強く感じる。しかし、本校の児童の様子からは、感動や驚きがあっても、自分の思いや感じていることを言葉や動作で素直に表すことがなかなかできない。学校生活における実態調査からも授業中の発表の場面では緊張したり、恥ずかしがったりして苦手だと答える児童が約6割も見られた。

体育科の学習では心と体を一体としてとらえることを重視している。自分の思いや感じたことを身体を通して表現する表現運動はまさに心と体を一体としてとらえることが大切な学習である。心で感じたことを身体で表現したり、リズムにのって楽しく踊ったりすることで自分らしさを発揮することができ、さらに仲間と交流し、お互いを意識して表現することで、より一層達成感や喜びを味わうことができる。

しかし、今までの表現運動の指導では、心身を解放して楽しく動くための手だてや動きを引き出すための工夫を十分に行うことができなかった。従ってイメージしたことを体で表現することについては、「恥ずかしい」「どう動いていいかわからない」というような、抵抗を感じてしまう児童が多かった。教師や友達の模倣はできるが、自分の想像したことやイメージ、発想など思いついたことを動きにする場面では立ち止まってしまう児童も見られた。そこで題材や仲間とのかかわりを工夫しながら即興的に表現する「動きのデッサン」を繰り返し行うことで、自分の思いや感じたことを体全体で動くことに慣れ、表現することへの抵抗感をなくすことができると考えた。これにより、恥ずかしさを取り除き、楽しみながら表現する喜びを感じ、自信をもったのびのびとした表現ができるようになると思った。

以上のことから、児童の実態に応じて題材やかわりを考慮し、即興的に表現する「動きのデッサン」を学習活動に繰り返し取り入れることにより、体全体を使って自信をもったのびのびとした表現ができるようになり、表現運動における生き生きとした豊かな表現力を育てていけるものと考え、本主題を設定した。

## 研究のねらい

表現運動において生き生きとした豊かな表現力を育てていくことができるよう、即興的に表現する「動きのデッサン」を学習活動の中に取り入れることによる有効性を実践を通して明らかにする。

## 研究の見通し

次の各過程に「動きのデッサン」を取り入れることにより、生き生きとした豊かな表現力を育てることができるであろう。

- 1 つかむ過程において、動作からイメージを連想しやすい題材で「動きのデッサン」を行えば、心や体を解放して、体全体を使って表現する楽しさを味わうことができるであろう。
- 2 追求する過程において、仲間とかかわりながら「動きのデッサン」を行えば、仲間の表現のよいところに気付き、それを生かしたり取り入れたりした多様な表現ができるようになるであろう。
- 3 まとめ過程において、表したいものに変化を加えながらひと流れの動きとして「動きのデッサン」を行えば、工夫する楽しさの中で自分の思いを広げ、自信をもって表現することができるであろう。

## 研究の内容と方法

### 1 研究内容

#### (1) 「表現運動における生き生きとした豊かな表現力」とは

表現運動における生き生きとした豊かな表現力とは、題材の様子や特徴をとらえ、体全体を使った多様な表現を、自信をもって表現することができる力ととらえることである。表現運動の特性は動きのよしあしや美しさだけでなく、体全体を使って動く楽しさや体で表すことのおもしろさもある。他との競い合いや同じ動きをすることをめざすものではなく、自分らしさや自分の考え、それぞれの違いが大切にされることで、一人一人が自信をもち、生き生きとした豊かな表現力を育てていけるものとする。

#### (2) 「動きのデッサン」とは

「動きのデッサン」とは、題材から連想したイメージを即興的に表現することであり、踊ることと創ることが一体となり、思いついたことをすぐに体全体の動きで表すことである。うまく表せなくても、きちんとできあがったものでなくても、まず、体を使って動いてみるという経験を積み重ねることで、表現することへの抵抗感を減らしていくことができると思う。

仲間とかかわって「動きのデッサン」を行うことは様々な表現の仕方に気付き、自分の表現を広げていくことになる。また、自分の表現を相手に認めてもらったり、相手の表現のよいところが分かったりすることで、自信をもって表現できるようになると考える。

### 2 研究の方法

研究の見通しに基づき、次のような計画で授業実践及び検証をする。

(1) 授業実践計画

対象	高崎市立南八幡小学校 3年1組(男子12名、女子13名 計25名)
単元名	表現(表現運動領域)「 にすぐに変身しよう！」
時期・時間	10月 5時間予定

(2) 検証計画

検証項目	検証の観点	検証の方法
見通し1	つかむ過程において、「走る-止まる」「飛び散る-飛び散る」など、動きからイメージを連想しやすい題材で「動きのデッサン」を行うことは、心や体を解放して体全体を使って表現する楽しさや喜びを味わううえで有効であったか。	・学習カードへの記述の分析 ・学習活動の観察
見通し2	追求する過程において、「自動車と水たまり」「この音なあに？」など、仲間とかかわり合いながら「動きのデッサン」を行うことは、仲間の表現のよいところに気付き、それを生かしたり取り入れたりした多様な表現ができるようになるうえで有効であったか。	・学習カードへの記述の分析 ・学習活動の観察
見通し3	まとめの過程において「だんだん、だんだんできあがり」で表したいものに変化を加えながら、ひと流れの動きとして「動きのデッサン」を行うことは、工夫する楽しさの中で自分の思いを広げ、自信をもって表現ができるようになるうえで有効であったか。	・学習カードへの記述の分析 ・学習活動の観察

(3) 抽出児童

A	運動能力や理解力は高いが、恥ずかしがっていて進んで取り組む様子は見られない。他教科では積極的な面も見られるので、即興的に表現する「動きのデッサン」を通して賞賛の言葉をかけながら、恥ずかしがらずに楽しく表現ができるようにしたい。
B	マイペースなところがあり、自分の興味があるものに対してはよく取り組むことができる。友達とかかわって即興的に表現する「動きのデッサン」を行うことにより、お互いのよさを認め合い、自分とは違った考えや意見も取り入れ進んで工夫し、豊かな表現ができるようにしたい。

研究の展開

1 単元の考察、目標及び評価規準

考察	表現運動は、「身近な生活から選んだ題材の表現」及び「空想の世界などから選んだ題材の表現」の例示から、児童の関心や能力にふさわしい題材と活動を取り上げ、イメージを広げ、表したい内容にふさわしい動きや多様な感じの表現に取り組みるようにするものである。また、児童の実態に応じて「動きのデッサン」を学習過程に取り入れることにより自信をもって生き生きとした豊かな表現ができるようになるものとする。	
目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分のめあてをもって、仲間と互いに励まし合い、教え合い、認め合うなど協力して課題に取り組み、安全に活動し、表現運動の楽しさや喜びを味わうことができる。</li> <li>表したい感じをまとまりのあるひと流れの動きに工夫した表現ができる。</li> <li>身近な生活の中から題材を選び、その主な特徴や感じをとらえて表現したり、空想の世界などの想像が広がる題材から多様な場面をとらえて表現したりすることができる。</li> </ul>	
評価規準	おおむね満足できる状況	十分満足できる状況
	<ul style="list-style-type: none"> <li>心身を解放し、表現運動の楽しさや喜びを味わおうとしている。</li> <li>示された課題に取り組み、仲間のよさを認め、協力して練習や発表をしようとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>心身を解放し、友達と気持ちをあわせて表現運動の楽しさや喜びを味わおうとしている。</li> <li>示された課題に積極的に取り組み、仲間と互いのよさを認め合い、協力して練習や発表をしようとしている。</li> </ul>
評価規準	<ul style="list-style-type: none"> <li>課題にあったイメージをもち、動きを工夫している。</li> <li>課題の解決のための練習や発表の仕方を、考えている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>課題にあった多様なイメージをもち、動きをいろいろと工夫している。</li> <li>課題の解決のための練習や発表の仕方を、進んで考えている。</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>題材の主な特徴や感じをとらえて表現したり、表したい感じをひと流れの動きにして表現したりすることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>題材の主な特徴や感じをとらえて表現したり、表したい感じを的確にとらえ、ひと流れの動きにして表現したりすることができる。</li> </ul>

2 指導計画と評価計画(資料編参照)

研究の結果と考察

- つかむ過程において、「走る-止まる」「飛び散る-飛び散る」などの動きから連想するイメージをとらえ、「動きのデッサン」を行うことは、心や体を解放して体全体を使って表現する楽しさや喜びを味わううえで有効であったか

まず、教師の動きの真似をしながらウォーミングアップを行った。ここでは、動くことの抵抗感を取り除くために、「先生がどんなことをしても絶対に同じに動くこと」と約束をして行った。おかしな格好や動きでも、児童は笑いながらも全員が真剣に真似をすることができた。このウォーミングアップは単元を通して授業の始めに行うこととし、徐々に仲間同士で動きの「真似っこ」ができるようにした。また、「走る - 止まる」の課題につながるように「だるまさんがころんだ」をしながら様々なポーズで止まる活動を通して、児童は普通の遊びから表現へとスムーズに入ることができた。ウォーミングアップでは抽出児A、Bともに自分の考えたポーズで止まり、楽しそうに取り組んでいた。次に「走る - 止まる」の課題を行った。思いっきり走り、ピタッと止まるという動きでは全力で走ったり、力を入れて様々なポーズで止まったりするなど体全体を使って動く様子が見られた(資料1)。

資料1「走る - 止まる」

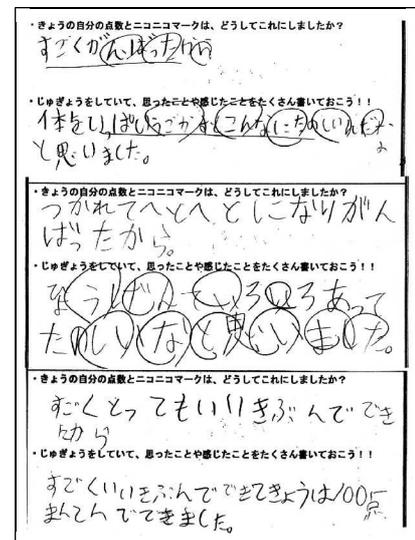


第1時の最後に、それぞれがとらえたイメージで簡単な表現の見せ合いを行った。資料2は第1時を終えての児童の感想であるが、体の動きや使い方を意識した感想が多く、心や体を解放して楽しく表現できたことがわかる。また、「次にはがんばりたいところはどんなことですか」という問いにも「もっともっと大きく体を動かしたい」「はずかしながらがんばる」「もっといろんな動きができるようになりたい」など意欲的な感想が見られた。Bは授業後に「楽しかった」と答えている。しかし感想では「だるまさんがころんだ」はおもしろかったが、「走る - 止まる」の課題では思うように自分の考えが出せなかったことを振り返っており、やや物足りない様子がうかがえた。

資料2 児童の感想

第2時の導入では前時の課題で出たイメージを書いたカードを使い、「動きのデッサン」を行った。カードをめくるまでは何がでてくるかわからないという緊張感もあり、遊び感覚で楽しみながら取り組めた。

「飛び散る - 飛び散る」の課題では「花火」や「バクダン」「油がとびちって地面にくっつく」といったイメージが出され、活動後には、「飛び散るときに体をいっぱい使ってがんばった」「いつもより大きくできてよかった」「油がとびちるところで足に力をいれてとんだこと」など、体全体を使って表現できた様子が何人もの児童の感想からうかがえた(資料2)。Aは時間がすぐに終わってしまい、少ししか活動ができず、自分の思ったように表現できなかったことから、楽しくなかったと答えている。Aがすぐに動き出せない様子が見られたので、教師から、どんな表現をしたいのか聞いてみると、いくつかのイメージを出していたがどれにしたいか迷っていることがわかった。そのため励ましの言葉と、表現しやすいイメージを選んで行ってみるよう言葉かけをした。このようにAは「動きのデッサン」を行うにはまだ抵抗があったが、次にはがんばりたいところには「もっと表現をつくりたい」と書いていることから、授業に対して前向きに取り組んでいる様子がうかがえた。一方、Bは第1時に比べ、すぐにイメージをもって動くことができるようになり、「みんなでパーンと飛び散ったところはおもしろかった」と感想に書いている。両児童とも友達と一緒に協力して活動できた様子が見られた。つかむ過程においては、ほぼ全員の児童が「楽しかった」と答えている。



これらのことから、「走る - 止まる」や「飛び散る - 飛び散る」では動きから連想するイメージを動きのデッサンにより即興的に表現することで、それぞれの課題において児童は心身を解放し、体全体を使って思い切り動くことができ、表現する楽しさを味わうことができるようになるうえで有効であったといえる。

2 追求する過程において、「自動車と水たまり」や「この音なあに？」などの課題で仲間とかかわりながら「動きのデッサン」を行うことは、仲間の表現のよいところに気付き、多様な表現ができるようになるうえで有効であったか

ウォーミングアップでは、前時までに多くの児童が心身を解放して体を動かすことを体験できたことから、すぐに即興的に動くことができるようになってきた。

「自動車と水たまり」では、5人くらいのグループに分かれイメージを出し合った。各グループとも仲間と積極的にかかわり、自動車役や水たまり役をきめ、詳しい様子を表現しようと動きもまじえながら熱心に動きづくりを行っていた。

資料3はその時の様子である。Aは活動後「自動車と水たまり」が一番楽しかったとあげており、自動車が来るタイミングにあわせて水が飛び散ったり、水たまりの様子が変わるといった表現に喜んで取り組んでいた。このように具体的にイメージがもてると表現も生き生きとし、仲間同士のかかわりも活発に行われるようになることがわかった。

「この音なあに？」では動きになりやすい擬音語、擬態語から想像される様子を表現した。児童は「ニョキニョキ」からは、「理科で習ったホウセンカが伸びる様子」

、「ピリピリピリ」からは、「電気がこわれる様子」を表現していた。この時間も「みんなで協力しておもしろいことをいっぱいやった」や「いつもよりすごい表現ができた」といった感想が見られ、全員が楽しく取り組めた様子うかがえた。さらに、「友達がとってもじょうずだった」など仲間とかかわり、自分とは違った考えや表現を認め、よいところを見つけることもできるようになってきた。また、動きも活発になり多様な表現ができるようになった。

Bはグループ編成の際はいつも孤立しがちであったが、毎時間リーダー交代で「動きのデッサン」を行うウォーミングアップなどを繰り返し行っているうちに、徐々に友達の意見もよく聞き、協力して取り組めるようになっていき、イメージを出し合う場面では自分の考えも進んで出せるようになった。授業後のアンケートで次の時間にがんばりたいこととして、「友達の真似をすること」をあげており、仲間を意識して一緒に動いたり、表現したりすることの楽しさやうれしさを感じている様子が見られた。以上のようなことから、仲間とかかわり合いながら「動きのデッサン」を行うことは、仲間の表現のよいところに気付き、自己の発想や表現を広げるきっかけとなり、多様な表現ができるようになっていくうえで有効であったといえる。

3 まとめの過程において、「だんだん、だんだんできあがり」のように表したいものが変化の様子やひと流れの動きをとらえた課題で「動きのデッサン」を行うことは、工夫する楽しさの中で自分の思いを広げ、自信をもって表現できるようになるうえで有効であったか

第5時は、だんだん変化していく様子表現する活動を行った。教師の言葉かけで一緒にポップコーンができる様子や綿菓子ができる様子を表現した。変化の様子が分かるようにするため、ある程度のもつまった長さの動きになったが、最後まで続けて表現することができた。グループごとにイメージを出し合う場面でも「ホットケーキが焼けるところ」「ソフトクリーム」

資料3 仲間との動きづくり



「花がつぼみから開くところ」「えんぴつけずり」「虹ができるまで」など様々なものが出され、話し合いながら次々と「動きのデッサン」を行い、繰り返し練習する様子が見られた。その後、いくつかのグループごとにまとめた表現を見せ合ったが、児童から「全部のグループの表現が見たいから、一つずつ発表して」という声があった。これは単元を通して「動きのデッサン」を行ってきたことで、心と体を解放するとともに、自分たちの表現を自信をもって発表できるようになってきた表われともいえる。発表ではどのグループも大きくしっかり動いて表現することができた（資料4）。また発表のあとの感想からは、他のグループのよくできていたところが数多くあげられ、どのグループも満足そうな表情をしていた。

Bは授業後の感想でも「ホットケーキが焼けるときプツプツいうところを工夫したのが、見てるみんなにわかってもらってうれしかった」と書いており、自分で進んで工夫したことがグループで表現できたことに満足している様子が見られた。Aも「ちゃんとできて楽しかった」と答えており、話し合いでも進んで考えを出し、グループをリードしながら取り組んでいる様子が見られた。

以上のことから、まとめの過程で表したいものが変化する様子や、ひと流れの動きで「動きのデッサン」を行ったことは、工夫する楽しさの中で自分の思いを広げ、自信をもって表現できるようになるうえで有効であったといえる。

#### 研究のまとめと今後の課題

生き生きとした豊かな表現力を育てるうえで、表現運動の学習過程において、継続的に「動きのデッサン」を取り入れたことは有効であった。特に児童の実態により題材や支援を工夫し、仲間とのかかわりを考慮して「動きのデッサン」を繰り返し行ったことで、児童は徐々に様子や特徴をとらえた多様な表現を自信をもって行うことができるようになった。

話し合いの場面では、お互いの表現を受け入れながら一つのものに決めていく様子が見られた。このように仲間づくりや友達のよさに気づくという点においても、表現の授業を通して学級内の意識が高まり、仲間とのかかわりが心身を解放して恥ずかしさを取り除き、豊かな表現へつながる重要な要素であったことがわかった。

児童はイメージを出し、すぐに体で動き表現することに楽しさを感じ、即興的な表現を抵抗なく行えるようになった。しかし、単元を通して教師の言葉かけや題材の選定についても児童の表現力に大きく影響をあたえることを強く感じた。今後は児童の表現を引き出せるような教師の言葉かけ、題材選びを中心にさらに指導の工夫をしていきたい。

#### <参考文献>

- ・松本 千代栄 他著 『ダンスの教育学1 ダンス教育の原論』 日本教育書籍（1992）
- ・松本 千代栄 他著 『ダンスの教育学2 表現運動の学習』 日本教育書籍（1992）
- ・村田 芳子 編著 『楽しい表現運動・ダンス』 小学館（1998）

資料4 グループ発表  
「えんぴつけずり」



「虹ができるまで」

